



笠原 賢二

一般社団法人東北経済連合会 副会長

明治元年から150年
会津藩に
関係する
二人の
友人から

今年は明治元年から150年を迎える年となりました。歴史が変わる時には、戦争、災害等の悲惨な事を伴うことが多く、関係者にそれぞれの試練を与えてきました。私の友人に会津藩に係わる方が二人おります。

一人は、保科正興氏(積水化学工業同期、大学同期生)です。長野県高遠城主に繋がり、会津藩主保科正之により再び元の保科家に返却されてから十三代目当主に当たるそうです。会社の同期入社で、しばらく「お前、俺」と呼び合う間柄でした。平成22年に、須賀川経営者協会での講演会に講師として依頼し、快く引き受けていただきました。保科家は、武田信玄の家臣として重用され、武田家の滅亡後、徳川家康から直に小刀を賜り、長野高遠城主として登用されたとのこと。家康は武田騎馬隊に相当な尊敬の念を持っていたと思われます。それが、保科家が二代将軍秀忠の庶子を密かに預かることに繋がります。そして、保科家は江戸幕府に対して正之の誕生を嫡子として届け出、家よりも将軍の子を守るという選択をしました。その後、正之は三代将軍家光に義理の弟として認められ、会津藩主、また松平姓を名乗ることも許されます。一方、保科姓は正之から返却されますが、城のない殿様として幕府の中枢に存在、幕末は千葉県富津に管領地を持つこととなります。正興氏は今も高遠保科家の墓を守っているとのこと。

もう一人は、飯沼一字氏(高校同期生)で、白虎隊士飯沼貞吉の孫です。東北大学医学部小児科教授を退官後、石巻日赤病院院長時に東日本大震災に遭遇しました。当時、仙台の自宅にも帰らず、病院で陣頭指揮を執ったことはテレビや新聞にも大きく報道されました。氏にも震災後、平成25年の須賀川経営者協会での講演会で講師をしていただきました。主な内容は、震災に対する事前のネットワーク構築および非常時における迅速な対応の重要性についてでしたが、会津白虎隊の生き残りである貞吉翁とその家族に対する大いなる誤解を解くことに関する苦勞談もありました。詳しくは弟の一元氏が貞吉翁と白虎隊について記載した本を発行されておりますので、そちらをご参照いただければと思います。

ご両人のお話から、非常時にはさまざまな関係者が使命感と信頼感を共有し、協力しながら対応に当たってきたのだとあらためて感じました。東日本大震災から8年目に入ります。先人に学び、仲間を信頼して自らの役割を果たすことが我々の務めであると考えております。

(福島県経営者協会連合会 会長・かさはら けんじ)